

花・彩・祭おおさか2006に思う

全国都市緑化フェアは今年で23回目となった。その嚆矢は大阪の服部緑地で昭和58年(1983)の秋に開催されたグリーングロー大阪である。当時は、公園等の整備事業が第三次五箇年計画のもとに推進されており、都市住民一人当たりの公園面積を4.1㎡(1981年)から5.0㎡(1985年)に増やすことを目標としていた。

一方、都市緑化の機運を高めようと全国的なイベントを展開することになり、その拠点として都市緑化植物園を設けるとともに、開催地となる公園を改修あるいは新設されることが期待された。その都市緑化フェアは毎年東京、神戸と順次開催され、多数の観客を集め、開催地の都市環境の改善、美化の推進にも役立ってきた。

このフェアは、都市緑化月間の10月を中心に秋季に開催されるのが通例であった。春季に開催されたのは、1990年の国際花と緑の博覧会後の茨城における第10回「グリーンフェア'93」が最初であった。その会場は、梅で有名な偕楽園そして主会場の千波公園では花のシルクロード沿いに180種の花々が咲き誇り華やかで明るい雰囲気であった。

今回の大阪城での全国都市緑化フェアも3月末から開催され、花がまさに主役となり緑が後退した祭というイメージは拭いきれない。しかし、花博の理念を継承した花と緑のまちづくり、ひとづくりのボランティアの取り組んでいる市内各所にある「まちなか会場」を見て回るには春が好適期であろう。また、市民が楽しみにしている西の丸庭園の桜の花見の時期に合わせたともいえよう。春はのびやかで、花の種類が多く、色も彩やかであり人出も多い。

しかし、秋は緑化の源点となる種実が稔るときで、都市緑化フェアの開催にふさわしい時期ではなかろうか。

秋の日は釣瓶おとしと短くわびしいが、秋の草花には「萩が花 尾花 葛花撫子の花 女郎花また藤袴 朝顔の花」の七草があげられ、菊の花が香りを添える。万葉の歌人も「冬ごもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 開かざりし 花も開けれど 山を茂み 入りても取らず 取りても見ず 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば取りてそ賞ふ 青きをば置きてそ嘆く そこし恨めし 秋山 吾は」と詠み、秋を推賞している。都市から離れた里山のことだが、都人には身近な山里が望まれるはずである。秀吉の大阪城には茶の湯を嗜む山里曲輪があったという。



樹林と草花



もてなしの花座敷

清水正之記

万物を生成する3つの要素

『こもれびの庭』

〈大地・水・空〉

をモチーフにした庭園

第23回全国都市緑化おおさかフェアの出展事業維持管理・運営を(財)都市緑化基金から受託

「こもれびの庭」では、大地・水・空をモチーフとして、最新の自然再生技術と環境共生技術を用いてエコロジー世界を表現した。「地球環境、自然再生、循環社会の形成等」をテーマとし、出展庭園区域を「エントランス」「木もれ日広場」「水の庭」「大地の庭」「空の庭」の5つのエリアに区分。バリアフリーな展示形態を整えた回遊型庭園とした。

5つのエリアで構成された 回遊式庭園

こもれび広場

～木チップ舗装を敷き込んだ心地よい空間～

広場中に草花（ガザニア・クリサンセマム・パルドサーム・ゼラニウム・バーベナなど）をあしらって、エコアート作品をちりばめ、参加する芸術家によるエコイメージの表現の場としました。



大地の庭

～里山の美しいみどりを表現～

段状の棚田地形にレンゲなどの草花が咲く近畿の果樹園であり、背景はコナラ林となり、主な樹木は、ウロモミジ・エゴノキ・ヤマモミジアセビ・サラサドウダン・ナツハゼ。下草はオオバジャノヒゲ・コグマザサ・シャガです。林間部分は、同じ近畿の自然表土を移植し、早期の自然回復を可能としています。



水の庭

～水の生命力あふれる動きと
生き物の源を象徴～

せせらぎの音で自然観、ビオトープ池の水草の植生と小動物で生命の源を表現。池と陸の境界の一部は植栽せず観察するための「移行帯」として会期中の記録を公開し、自然の変移を実感するフィールドとしました。



空の庭

～花の空中庭園～

人工地盤における植栽と灌水システムの展示です。屋内展示が行われる建物(エコホール)の傾斜した屋根部に草花でお花畑を作り、中央部に向かって伸びる階段を設け、屋根の後ろに広がる空を取り込んでいます。



エコホール

～集いの場～

自然再生技術など国の環境施策を展示。また緑化活動・自然保護活動を推進する市民団体による様々なイベント会場となりました。(木造平屋建て 120㎡)

後藤隼人 記(企画・設計)

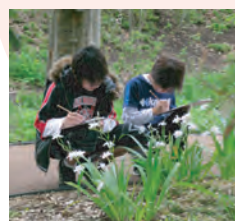
笑顔いっぱい・・・ ときには、真剣に・・・ 「こもれびの庭」エコホール でのイベント風景

「こもれびの庭」は、さまざまな団体によるイベントでにぎわい、多くの来場者が交流を深めました。



- ペットボトル花飾り教室
- 竹の器寄せ教室
- 木の実を使った工作教室
- 寄せ植え・押し花教室
- 間伐材クラフト教室
- 寄せ植え教室
- ハンギングバスケット教室
- 枝を使ったオブジェ教室
- ヨシクイズラリー教室
- 雅楽演奏

当センターも植物を中心としたスケッチ教室・ハーブイベントを開催しました。



ハーブの展示、ハーブティーのサービス、匂い袋作りには、子供たちを含み大勢が参加され、ホールに風が通るたびにほのかなハーブの香りが漂い、心が癒されると喜ばれました。 山口公子 記

日本庭園研究講座を開催しました

若い新進の造園家を対象に、日本庭園の理解を深め、その技術を学びとり、現代に活かそうという主旨で〈日本庭園研究講座〉を本年度から〈庭づくり入門講座〉と連携して、事務局のある京阪マーキス梅田の一室で開催した。受講生は10名、下記のとおり、講師の方々から各日の午後7時から2時間の講話があった。

■ 7月27日	吉田徳治 先生	日本庭園の源流	■ 12月12日	吉田昌弘 先生	回遊式庭園
■ 7月25日	福原成雄 先生	枯山水の庭園	■ 2月20日	吉田徳治 先生	一般住宅の日本庭園の 作り方（庭石とその使い方）
■ 9月26日	吉田昌弘 先生	空間構成の技法	■ 3月21日	吉田昌弘・福原成雄 先生	石組・石積
■ 10月24日	吉田徳治 先生	日本庭園とその 作り方（設計の仕方）	■ 4月24日	吉田徳治 先生	庭木とその使い方

受講者の感想

全8回の座学では日本庭園の歴史から各庭園様式の特徴、空間構成の手法、庭園の設計、素材と設計の詳細まで幅広く学ぶことができ、その間に座学のテーマに対応した庭園見学を4回織り交ぜたとともに内容の濃い研究会であった。先生方による講話は真剣で情熱があり、また一方でユーモアのある話で自然と引き込まれていった。日本庭園における一般的な考え方を述べられた上で、少し角度を変えた見方でのお話をされ、興味深く聞かせて頂き、またそういう考え方もあるのかと気付かされる事も多かった。

特に印象に残っていることをいくつかあげると、吉田徳治先生は一般的に仏教とのつながりがあるとされる日本庭園において、仏教と日本庭園は距離をおいて考えるとよいということであった。もともと日本庭園は自然を模した庭園だったが、中国の思想が入ることで姿を変えていったそうだ。また先生はこのことに関連して、須弥山や三尊石といった宗教関係の命名は庭園の理解を複雑にしてしまうので、単純に中島などでよいのではないかと話され、江戸時代以降の庭園の大衆化によって多くの作庭書が刊行され、造庭手法が次第に形式化し墮落したとの指摘もされた。

このことについて、吉田昌弘先生の見解では、江戸時代の庭園指南書は形式として手法を載せているだけで、なぜそうするのかについての理由が書かれていないとの指摘があった。そして、飛石の打ち方についても、いろいろに名称が付けられ広まっているが、歩き易ければ自由自在に打ってもよいだろう。しかし、景にならなければだめだ。また回遊式庭園の池は形状を複雑にすると見えがくれによって景色が大きく変わる。このように、庭園手法についてなぜそうするのか、そうすることによって庭がどう見えるのかということをお教え頂いた。

福原先生は、背景に山があるから借景ではなく、背景をどう生かすかを考えた庭が借景の庭だというような、明快だが奥の深い言葉を私たちに投げかけてくれた。

今回の一連の研究講座で学んだ私たちが最も心がけなければならないことは、「古来の良い庭園をよく見てしっかり学び自分なりの手法を見つけ確立することが大切であり、古いものの真似はいらない」という吉田徳治先生の厳しいお言葉だと思う。すなわち、自分の手法を確立するために古い名園を注意深く観察し、自分の感覚へと吸収することである。この講座を聴くことによって、何事にも少し立ち止まり、疑問を持って対面してみるという態度を学ぶことができた。このような大切なことに気付かせてくれる場を与えて下さった先生方に心から感謝します。

浦崎 真一

庭づくり入門講座の見学会

前年度に引き続き、年間4回の庭園見学会が予定され、下記のように催されました。

平成17年9月10日（土曜日）曇

見学地 : 妙心寺の山内・退蔵院庭園（室町時代）
東海庵庭園（江戸時代末期）
講師 : 福原成雄先生 理事 吉田昌弘先生
参加者 : 30名

平成17年11月12日（土曜日）曇のち晴

見学地 : 表千家
講師 : 山野陽太郎先生
参加者 : 51名

平成18年1月21日（土曜日）曇

見学地 : 白砂村荘・銀閣寺
講師 : 顧問 近藤公夫先生 武田純先生 理事 吉田昌弘先生
参加者 : 27名

通常総会および理事会の報告

通常総会

平成17年6月17日(金)午後3時から、大阪府新別館北館「以和貴荘」において、平成17年度通常総会を開催した。総正会員75名の過半数57名の出席となり本総会は成立した。清水理事長を議長として、議案平成16年度事業報告および決算報告、平成17年度事業計画案および収入・支出予算案、ならびに定款の一部変更(主たる事務所の登録地の変更)は原案とおり可決した。

総会後、駒井 修氏により「愛知地球博の天空鎮守の森」の講演があり、続いて、おおさかフェア委員会事務局より「花・彩・祭おおさか2006」について紹介説明があった。

理事会

平成18年2月7日(火)午後4時から国際造園研究センター事務所にて、清水理事長をはじめ理事8名(委任状8名)の出席により理事会が開催された。平成17年度収支補正予算案、および3月25日から開催の「第23回全国都市緑化フェア」に国交省が出展する「こもれびの庭」の運営管理に対する協力などについて審議可決した。

副理事長 坂本新太郎先生の監修による「日本の都市公園」出版記念講演会を開催

平成18年1月20日午後6時より「エル・おおさか」に於いてランドスケープコンサルタント協会関西支部の支援を得て開催した。

講師 漆畑良隆 (財)国際花と緑の博覧会記念協会
小森正幹 (財)神戸市公園緑地協会
宮崎壽泰 (財)大阪市公園協会
坂本新太郎 大阪芸術大学

漆畑先生は、大阪府営公園の現状と将来像、ボランティア活動の実態について述べられ、宮崎先生は大阪市の公園の発展について年代を追って解説された。小森先生からは六甲山系の緑化などの実話を交えて興味深いお話があり、そして殿の坂本先生は江戸時代の行楽地から明治そして現代の公園緑地に話をすすめ、公園等整備五箇年計画の顛末に言及された。参加者の都市公園の歴史と事業への理解を深めた。

会員の窓

● シンボルマークを募集しています

みどり、庭園、公園、生き物などをイメージしたものでN.P.O.法人国際造園研究センターの活動に相応しく、また、わかりやすく親しみのあるマークを募集します。

- ★ 最優秀賞 1点 賞金5万円
- ★ 優秀賞 2点 賞金1万円

募集要項

①用紙および大きさ	郵便葉書 縦横7cm以内
②色彩	自由
③締切期日	平成18年 7月31日
④送り先	大阪市北区西天満4-5-5 京阪マーキス梅田201 特定非営利活動法人 国際造園研究センター宛
※ シンボルマーク採用作品については、多少の加工をすることもあります	

● ご意見箱 (原稿募集)

みどりの環境に関するご意見や庭園見学会などのご感想を会報に掲載することにしていきますので、随時、下記のメールアドレス又は事務所までお送り下さい。

Eメール: donguri@citrus.ocn.ne.jp

<ご入会の案内>

当センターは都市緑化への協力に努めながら、造園、園芸技術の研究、研修会の開催、自然と環境問題の調査、国際交流の推進などをテーマに活動しています。関心をお持ちの方、主旨にご賛同の方はぜひご参加下さい。

	入会金	年会費
個人正会員	10000円	10000円
団体正会員	50000円	30000円
賛助会員	30000円	20000円
友の会	免除	3000円

<ご寄付のお願い>

当センターの活動をさらに活性化させるため、広く皆さまのご支援を賜りたく、ご寄付をお願い申し上げます。

<ご寄付>

次の方々よりご協力いただきました。有難うございました。

- 平成17年度
坂本新太郎 様 230,000円
- 平成18年度
辻正信 様 100,000円
田辺正一 様 70,000円
関西植木(株) 代表取締役 今里忠夫 様 150,000円
(株)大阪緑花 代表取締役 藤田貞吉 様 80,000円

<新入会員のご紹介>

個人正会員: 辰巳二郎、菅原文博、辻井博行、下休場千秋
友の会会員: 青木和子、坂東ひろみ、清水敏、横良子